

令和4年度 学校評価計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢伏見高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果（後期）	成果と課題及び改善策
1 生徒があらゆる場で誠実さ・聡明さ・品位・心の豊かさを追求できるように、教職員は安全で規律ある安心できる学校生活を日々実現する。	① 基本的な生活習慣の確立を図るため、遅刻を防止し、時間を守る指導を徹底する。	遅刻の延べ人数が前年度と比較して A：80%未満 B：90%未満 C：100%未満 D：100%以上	達成度 C 4月～12月 99.0% 昨年度 57.4%	2年生では89.7%、3年生は73.8%となり、昨年度と比較して遅刻者が減少しているのに対し、1年生が158.6%となり、遅刻者が増加している。遅刻が常習化している生徒が、1年生は他学年と比べてかなりいることが原因である。 【改善策】保護者の理解・協力を得ながら基本的な生活習慣を確立するなど、遅刻防止に向けての取組を行う。
	② 自発的な挨拶、正しい言葉遣いなどを身につけ品位のある人間性を養う。	自ら進んで挨拶できる生徒の割合が A：90%以上 B：85%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 C 12月学校評価アンケート（生徒）81.3% 昨年度 C 81.4%	校外で元気に挨拶する生徒は増えたが、「自ら進んで」挨拶をする生徒は81.3%でC評価となった。「自分から声をかけても、挨拶が返って来なかったら嫌」という理由で挨拶をしないという生徒が少なからずいる。 【改善策】挨拶の必要性・重要性について、生徒会役員や校風委員などと連携して意識づけをし、挨拶により元気で活力のある学校を目指していく。
	③ いじめ防止に関する講話や教員対象の研修会などにより、生徒・教員ともにいじめに関する認識の向上を図り、いじめの起こらない雰囲気をつくる。	本校の「いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめやネットトラブルの未然防止に学校全体で組織的に取り組んでいると回答する教職員の割合が A：100% B：90%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 B 12月学校評価アンケート（教員）92.9% 昨年度 A 100.0%	教職員がいじめの定義を理解し、生徒からのサインを見逃さず、些細なことであっても情報交換することでトラブルの未然防止に努めている。後期で数値が下降した原因を検証し、今後も各学年や教科担任、保健相談、部活動顧問など様々な方面でアンテナを高くし、情報収集に努め、早期発見・早期対応を組織的に取り組みながら、いじめを許さないという雰囲気づくりにも取り組んでいきたい。
	④ 学校生活の中で、環境保全に対する生徒の意識を高め、実践する。	ゴミの分別、教室やトイレの消灯、校内の環境保全活動に積極的に取り組んでいる生徒の割合が A：95%以上 B：85%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 B 12月学校評価アンケート（生徒）90.9% 昨年度 A 90.8%	今年度途中から、清掃時に生徒が教室等のゴミを集積場まで捨てに行くことになったことから、少しずつゴミを分別する意識が高まってきた。来年度は美化委員にも分別の手伝いをしてもらうことで、更にゴミを分別する意識を育てたい。また、教室やトイレの消灯については、教室から移動する際に電気を消し忘れて見受けられるので、粘り強く声かけをしていきたい。 ※A評価基準を昨年度の90%から今年度は95%に引き上げた。
学校関係者評価委員会の評価	昨年度と比較して、2・3年生の遅刻の減少や生徒の時間を守ることへの意識が伸びていることは素晴らしい。人間力や主体性を高めるには、生徒に手をかけすぎないことも必要ではないか。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	社会で活躍するために必要な人間力や主体性を高めるために、授業や学校行事、部活動等で、生徒自らが考え行動する場面を設け、コミュニケーション・協働する力・チャレンジ精神を育成する。			
2 生徒が学習意欲を高め主体的に学ぶ態度と方法を体得できるように、教職員は深い学びの実現に向けて授業改善を重ね、評価の研究を進める。	① 不断の授業改善の実現に向けて、教科を超えて学び合う互見授業や研究授業を実施することにより、教員の資質を向上させ、生徒の学習意欲向上を図る。	（生徒）本校の教員は、生徒が主体的・対話的で深く学習できる授業を行っているという回答する生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満 （教員）生徒の学びが主体的・対話的で深いものとなるような授業手法を取り入れていると回答する教員の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート（生徒）92.3% 達成度 A 12月学校評価アンケート（教員）95.2% 昨年度（生徒）A 88.9% （教員）A 87.6%	昨年度よりも今年度、さらには前期よりも後期と「主体的・対話的で深い学び」に対する意識が、生徒、教員ともに高まっている。今後互見授業や研究授業後の意見交換の話し合いを活性化させ、教員の授業力向上に努めていきたい。また、生徒がグループ協議を行う際には、これまで以上に、より具体的に何に主眼を置いてどのような観点で話し合えばよいのかということを示唆して、より活発な協議となるように支援していきたい。 ※生徒に関して、A評価基準を昨年度の80%から今年度は90%に B評価基準を昨年度の70%から今年度は80%に C評価基準を昨年度の60%から今年度は70%に引き上げた。
	② 低学年からの進路指導を意識して、学習時間調査や面談を活かし、生徒が見通しを持って家庭学習に取り組む態度を育て、学習習慣の定着を図る。	1日平均2時間以上、家庭で学習している生徒の割合が A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	達成度 C 53.9% 1日2時間以上の生徒割合 1中 1期 2中 2期 1年 19 31 28 37 2年 60 73 61 74 3年 69 73 66 59 全体 49 59 51 57 単位%	【1年生】学習に対する意欲を上げるために担任による面談や授業担当者の声掛けを行ってきたが、結果が伴わなかった。 【2年生】クラスごとの学習時間を掲示し、他者と自分を比較する機会を設けたり、担任が面談で個々に合った学習方法を提示したりしたことにより数値が上昇したと考えられる。 【3年生】推薦入試受験者が面接や小論文等の対策に力を入れたため、学習時間が減ったと考えられる。また、2学期以降は、進路決定者の学習意欲が低下して、学習時間が減った。 【学習指導のあり方の再検討結果】 ・担任や授業担当者の声掛けの工夫や、考査に向けた計画表の作成などにより、学習への意欲を高める。 ・個に応じた学習方法を助言することで学習時間を増やす。 ・面接や小論文指導を受けた時間も学習時間の集計に入れる。
学校関係者評価委員会の評価	新しい評価方法について教員が理解し、それを生徒に周知することが不足しているのではないかと。また、低学年への指導をさらに充実させ継続的な意欲向上の機会を設けていく必要がある。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	新学習指導要領の理念とその達成のための評価方法について、教科内での研修をより活性化させ、必要に応じて研修センターの出前講座等の活用を促していく。また、低学年の進路意識の向上につながる企画を進路指導課や学年で検討し、学校全体の組織的戦略的な取り組みに繋げていく。			
3 生徒がより高い進路目標を掲げその実現に向けて邁進できるように、教職員は総力を挙げて生徒一人一人の進路実現を支援する。	① ホーム担任等との面談を繰り返し、生徒が将来を見据えてより高い進路目標を設定できるようにするとともに、生徒の進路実現に向けて、全教職員でサポートする体制を整える。	担任との個人面談や進路ガイダンスにより、志望する進路先を明確にすることができた生徒の割合が A：95%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 B 12月学校評価アンケート（生徒）90.1% 昨年度 A 91.7%	評価B 90.1%（7月89.8% 昨年度前期90.1%、後期91.7%） 面談が進路を考える上で参考になったと回答した生徒の割合が、1年生95.8%、2年生90.5%、3年生84.1%で、前期と比較して全体では89.8%→90.1%と微増した。特に1年生の結果が高い値であり、進路選択・文理選択決定に向けた面談が有用なものとなっている。今後は、さらに高みを目指す意識を育てるような助言や指導を面談に取り入れていきたい。 ※A評価基準を昨年度の90%から今年度は95%に引き上げた。
	② 地元で活躍できる人材の育成を図るため、地元県内大学を第一志望とする生徒と保護者に対し、年度当初より進路説明会を実施し、合格に向けての個別の取り組み（平日補習、土曜補習等）を行う。	地元大学を志望する生徒のうち、第一志望に合格した生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 9月時点で国公立大学を志望した生徒のうち推薦・一般入試を受験した生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	達成度 A 地元大学第一志望合格率 87.3% 達成度 A 国公立受験割合 80.0% 昨年度 達成度 B 地元大学第一志望合格率 78.2% 達成度 A 国公立受験割合 80.8%	評価A 9月進路志望調査で県内4年制大学を志望した生徒のうち、第一志望大学（または同等以上）に合格した生徒の合格率は87.3%であった。学力の底上げのための取組みや志望校の入試研究と対策を行ったこと、また、様々な選抜方法でのチャレンジ、一般選抜での複数回の受験、更に共通テスト利用方式や共通テスト併用方式など、あらゆる有効な手立てで臨んだことが合格につながった。 評価A 9月進路志望調査で国公立大学を志望していた生徒のうち、実際に推薦や一般入試を受験した生徒の割合はちょうど8割であった。
学校関係者評価委員会の評価	進路志望先を明確にできたという生徒が大きく増えたのは、先生方の努力の証であると思われる。特に学年主任との個別面談は効果がある。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	現状に満足することなく、低学年からの指導を充実させ、より高い目標に向かってチャレンジしていく生徒を全職員で育成していく。			

4	生徒が生徒会活動・部活動・学校内外の行事・体験活動を積極的にいき成長できるよう、教職員は主体性を引き出す働きかけに努める。	①	部活動の加入率を高めて、学校全体の活性化を図る。また、生徒のバランスのとれた生活や成長に配慮しながら、部活動が適切に行われているか検証する。	部活動に登録した生徒の延べ人数が全生徒の A：90%以上 B：85%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 B 85.1% 昨年度 C 80.5%	数字の上では、目標を達成しているが、部によって活動内容に差が出てきている。特に運動部の団体競技では、部員不足で練習に支障をきたしている部もあるのが現状である。新入生が積極的に参加してくれるよう部活動紹介などを工夫したい。
				部活動が学校生活を活力あるものに行っていると考える生徒の割合が加入者の A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 B 12月学校評価アンケート（生徒）80.9% 昨年度 C 79.9%	前期から後期にかけて数値は下降しているが、昨年度と比べて数値が上昇していることから、部活動に参加している生徒は、それぞれ目標を持って取り組み、満足感を得ていると考える。 ※昨年度も学校評価アンケート（生徒）で判定している。次年度は加入者に限定したアンケート質問に変更する。
		②	ボランティア活動後の振り返りを充実させ、自己の成長を実感させることで、ボランティア活動に積極的に参加する意識を一層高める。	ボランティア活動が学校生活の充実につながると回答する生徒が参加生徒の A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 C 12月学校評価アンケート（生徒）70.5% 昨年度 C 70.7%	今年度行われたボランティア活動には、多くの生徒が自主的に参加し積極的に活動したが、評価はCとなった。後期に数値があがった要因として、実際にボランティア活動に参加し、充実感を得た生徒が増えたことが考えられる。 【活動の意義を実感させる取組の再検討結果】ボランティア活動後に、地域の方々の感想や感謝の言葉などを伝えることで活動の意義を実感する機会を設ける。 ※昨年度も学校評価アンケート（生徒）で判定しているが、次年度は、質問項目の回答をボランティア活動参加者に限定する。
学校関係者評価委員会の評価		学習以外の活動についてはコロナ禍で仕方がない結果であると思われる。部加入率も含めて、指標やアンケート項目を年度始めや途中に見直す勇気も必要ではないか。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		部活動の精選やウイズコロナにおけるボランティア活動の実施について、次年度も継続して取り組む。また次年度は、評価項目や達成度の経年比較に拘らず、学校評価計画を見直していく。				
5	新型コロナウイルスの感染およびその拡大のリスクを可能な限り低減した上で学校運営を継続し、生徒の様々な学習の場を保障する。	①	長くなったコロナ禍であるが、改めて新しい生活様式を遵守し、感染リスクの低減に努める。また、生徒や職員が感染した際の連絡体制およびその対応について、抜かりなく行うことで感染拡大防止に努める。	学校および家庭において感染防止に対する取組ができていないと回答する生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート（生徒）95.3% 昨年度 なし	ほとんどの生徒に新しい生活様式に関する理解が浸透し、「取り組みができていない」とする生徒が高い水準で増加しているが、一部の生徒は、密であることに無頓着であったり、平然と大声を出すなど、感染拡大防止に対して理解と配慮ができない状況が見られる。今後も必要とされる感染症予防対策を提唱していきたい。
				(全教員)本校の感染防止対策が十分行われていると考える教員の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート（教員）95.2% 昨年度 なし	この1年間の本校の感染状況は、県の感染状況の推移とほぼ同じ傾向であった。感染者の多くは家族からの感染であり、校内での感染拡大は、教育委員会のガイドラインに沿って対策を講じることで概ね防ぐことができた。今後は次年度5月からの感染症の位置付けの5類相当への引き下げによる対応の変更点を、全教職員が理解するとともに、学校の教育活動をコロナ禍以前の状況に戻していきたい。
学校関係者評価委員会の評価		ウイズコロナにおける様々な教育活動のコロナ前への回帰を実行している点が評価できる。次年度からの感染症法上の位置付けの変更に対応しつつ、更なる学習場面の補償に力を注いでほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		次年度からの変更に対応しながら、コロナ前の教育活動に戻す準備を進める。				
6	教職員は1～5の実現のため、より効率的かつ効果的な業務遂行を図り、組織的な業務改善策を提案する。	①	教職員が担当業務に応じてタイムマネジメントの意識を高め、分掌業務の効率化を図ることにより、勤務時間外の分掌業務を削減する。	(全教員)業務の効率化やタイムマネジメントの意識が高まったと考える教員の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	達成度 D 12月学校評価アンケート（教員）21.4% 昨年度 C 64.6%	前期はよくあてはまる2.3%、あてはまる32.6%であった。観点別学習評価等、昨年までなかった業務に対して、準備してきたことに課題が見つかり改善することになったことや突発的な対応が必要な業務が重なり、気分的な多忙感を抱える教職員が増加した。業務を削減することに目が行き、効率よく対応しタイムマネジメントを図る意識にまで繋がらなかった。 【次年度の取組の再検討結果】各自の業務を今一度見直し、教科指導方法の共有することやペーパーレス化を推進するなどの効率化を進めてタイムマネジメントの意識を高める。
				(各課・学年主任)主任を務める校務分掌において、業務の割り振りや効率化を図ることについて、 A：積極的に取り組んでいる。 B：取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：取り組んでいない。	達成度 B 12月学校評価追加調査 80.0% 昨年度 B 89.0%	前期と同じ80.0%であった。各分掌で業務の割り振りや効率化を図っているが、教職員の効率化とタイムマネジメントの意識が高まっていない。主任は状況に応じて担当者を割り振ったり、各分掌間の連携を高め、協力できる業務は協力して助け合ったりする。
学校関係者評価委員会の評価		新課程への対応や指導法や評価法が大きく変わる中で業務改善が滞ることは仕方のない側面もある。働き方改革の錦の御旗のもと、何でも削減すればよいわけではない。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		生徒一人ひとりへの熱心な指導と効率的な働き方の両立に向けて、重要度や緊急度の低い業務や会議を精選し、ペーパーレス会議の運用など更なる業務改善に努めつつ、教育水準を落とさないために必要なことは遂行していく。そのためにも、支援員等の配置についてさらなる充実をお願いしたい。				
7	教職員は、担当する教育活動の成果等について、保護者や地域に対し迅速かつわかりやすく学校HPや印刷物等を活用して報告する。	①	本校ホームページをより閲覧しやすいように工夫し、保護者や地域、中学生とその保護者等への情報提供を一層充実させる。緊急連絡は、一斉配信メールに加えてホームページでも発信する。	学校ホームページによって、本校の教育活動についての必要な情報を知ることができると回答した保護者等の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート（保護者）94.6% 昨年度 A 91.2%	後期の保護者アンケートでは、前期よりさらに高い評価をいただいた。本校のホームページは、6割以上の教職員が部活動や学校行事について定期的に更新しているため、更新頻度が高いことが保護者の評価につながったと思われる。また、「ホームページ更新をメールで知らせて欲しい」といったメール配信の更なる活用につながる保護者の意見も参考にしながら、今後も本校の教育活動が理解いただけるよう情報発信をしていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		保護者はホームページや配信メールにより情報を得ており、タイムリーに掲載、発信している現在の体制を維持してほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		ホームページのおお一層の充実を図るとともに、ページ更新をメールでお知らせすることを検討していく。				